

27号と28号の合併号となった本誌には、報告二題と記事が掲載されている。

一題目に掲載されている「看護学生における介護保険施設の就労イメージ—就労働機に関する意識調査—」は、看護師の就労場所として需要が増している介護保険施設における就労について、学生を対象とした調査結果に基づく研究である。高齢社会を生き抜くためには、快適な老後と尊厳ある最期がキーワードであり、その実現のためには施設で働く人材確保が不可欠となる。介護保険施設での看護について、学生はどのように考えているのだろうか。施設で求められる職能が自己実現に結び付くのだろうか。とても興味深い研究である。

そして、少なくとも調査対象であった学生の3割弱は、「卒業後、他科経験後に介護保険施設での就労を選択肢と考えていた」という事実と、「今後の看護学生教育の中で老年看護実習や専門職としての魅力の涵養が必要である」との結論は、今後の看護師養成校が向き合うべきキーワードであるし、介護保険施設看護師の社会的認知の向上と地位の確立、そのための社会発信こそが大学の使命であると、あらためて認識することができるものである。

二題目は、「あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師学校養成施設におけるICT活用に関する教員アンケート結果—単純集計からの分析—」である。あん摩師等養成施設の教員117名を対象としたアンケート調査に基づき、ICT活用の現状や教員の意識を検討している。コロナウイルス感染防止対策の恩恵の1つとして、「デジタル技術の進歩」があるが、端末やアプリケーションの開発が速すぎて、筆者のようなアナログ人間はシステムの根幹を理解せずに使用しており、トラブルが起きても対処できない不安を抱えて授業を行っているため、調査内容には心から共感できる。また、そんな筆者もICTを活用した教育効果は理解しており、さらなるシステム開発に期待している。この件について本研究の調査結果と一致している。本論文では、教育効果をより高めるためには、教員と学生の双方が「使いこなす技術」を向上させる必要があり、その努力が求められるとの結論に至っている。そのとおりであり反論するものではないが、願わくは、アナログ人間の不安を察知し、自動的にトラブルを解消してくれる技術の開発を心から望むところである。

記事は、2021年度に開催された、全学横断的シンポジウム講演抄録、全学研究ポスターワークショップ報告書、学内研究助成成果報告書が掲載されている。

コロナ禍にあって、集まれない、出ていけないという、不自由な研究環境であったにも関わらず、多くの研究者が工夫を凝らしてインテリジェンスな研究活動を展開したことがわかる。本学は医療系3学部で構成される小規模校であるが、研究者の専門分野は多岐に渡っている。このことは本学の強みといえる。すなわち顔の見える関係を構築しやすい小規模校ならではの環境を最大限に活用し、全学的な研究に取り組む下地が整っているということである。さらに研究委員会が全学横断的研究を後押ししているのであるから、なおさらである。研究に行き詰ったとしても、すぐ近くで手を差し伸べてくれる研究者が存在することは、大胆な発想のもとに、新分野を切り開くべき研究者にとって心強い。そして、このバックアップ体制が構築されることで、これまでの研究の限界だと諦めていた一線を越え、少しだけ背伸びをしてみたい。必ず、新しい世界を見ることができる。そこでは必ず新しい課題を発見することができ、これが研究ネタとなる。すなわち、論文を書くことができる。さあ、知恵を絞り、自身の殻を破ってみよう！

編集委員会は各位からの論文投稿を楽しみにしている。

明治国際医療大学誌編集委員会

木村隆彦